どこにも存在しない場所で

時を重ねるごとに一つずつ
背負う荷物が重くなる
ストレスと名付けた色濃い荷物
心に毒だけ増えていく
手と手をあわせて
眼と眼をあわせて
誰かに助けを求めたら
丹念に丹念に洗われて
自分の姿がわからない
剥がれゆく自分らしさ
心をどこかに置き忘れ
随分軽くはなりました
あなたがたが私を思う故
胸の中に胸の中に深く入り込んで
誰かに正しさ尋ねないと
自分の正しさわからない
これでいいですか
これでいいですか
そんな言葉を何度も繰り返し
人生に満開の春を迎えました
花はことごとく上手く咲き
そよ風が吹き抜けて
あなたがたが私から遠ざかるころ
何という空しい風の吹く
もう何年も何十年も同じ空間で
掴んでいるようで掴みきれない私の心は
決してもう泥に汚れようとはいたしません
わかってほしくて言いたいことがあったはずなのに
それを思い出せずに本当に歳をとりました

……古浜悦子